聞名仏教

第 128 号　　毎月発行
（発行日）2021 年 5 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園口２丁目７－２０
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話・ＦＡＸ（０７９８）
６３―４４８８
（発行人）土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉
毎月２２日 午後２時始
（8 月は休みます）
○〈念仏座談会〉8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
○〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
○〈真宗入門講座〉（副住職担当）
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

宗教の救い

佐々木蓮麿

蓮如上人のお文に
「一念に弥陀をたのみたてまつる行者には無上大利の功徳を与えたもう」
とあります。わたくしたちは、つねにこのおことばを読みながら、なんらの不審や疑問を起こさないのはあまりにも無感覚ではないか、と思います。それはお文のご化導をいつも聞き流しにして、自分の生活に下ろさないからでしょう。ご化導のおことばを一度自分の生活に下ろしてみると、必ず大きな疑問が起こります。

何となれば無上大利といえば、この上もない大きな利益ですから、そんな利益が与えられたのであれば、不足や不平のでるはずはないわけです。ところがわれわれの日常生活を反省してみるとどうでしょうか。不足や不平の連発、やがてはけんか口論にまで進みます。これがどうして無上の大利をいただいたといえるでしょうか、なんらの利益も得ておらぬといってもいい過ぎではありません。われわれは、もっともっと真剣に教えに取り組むことが大切であると思います。

現下、一般に流行している新興宗教に迷うのも、この無上大利がわからぬからです。わたくしどもは、まず真宗の一念大利無上功徳ということを明らかにせねばなりません。一念大利無上功徳ということは、一言にしていえば、いまの生活のままが、この上もなく幸福であると喜び、いかなる場合においても、そのまま喜ばれる生活に出させてもらうことです。いまが不足なしの生活でありますから、しいて「こうなりたい」の「ああなりたいの」というものがありません。これが雑行雑修のすたるゆえんなのです。

真宗で雑行雑修をきらうのは、いまの生活のままで不足がないから、他に祈ったり、願ったりする必要がないというわけで、別に堅苦しいおきてのように考えるべきではありません。したがって念仏をとなえるのも、となえて「どうなる」とか「どうする」というのではなく、ただ喜びのあまりにご恩をたたえるのみであります。

ではいまのすがたのままで喜ぶとは、どういうわけのものでしょうか、これが問題です。古来「そのままのおたすけ」とか「その機のなりのお救い」とかいわれたのも同じ意味でありまして、これがわかったようで、なかなかわからぬことなのです。

これは自分がどうなるかということではなくて、自分そのものあり方、生き方が一転することです。いままで自分の力で生活していると考えていたものが、自分に力はなかった、まったく他力によって、いま、現に生活せしめられている自分であると目をさまさせていただくことです。

ここにおいて、いまの生活そのものが「ありがたい」ということになるのです。「ありがたい」というのは、あることがむずかしいということで、すべてのものがわが力ではできない、まったく他力のなさしめであると喜ばせていただくことです。

ここに周囲が拝める生活がうまれるのです。何という広大なことでしょうか。これが無上の大利というものです。この生活に出ない限り、いかに結構な生活をしておっても、決して無上ではありません。

上には上があり、つぎか

らつぎへと不足が出てきます。おそらく死ぬまで満足な生活はできないでしょう。自分の小さな利益に目がくらんで、この無上大利を見失ってはなりません。

しかし、その境地にはなかなか出られないといわれるのですが、それは自分をたのみ、自分の力で出ようとするからです。

この態度でいるかぎり、永久に救われる時はこないでしょう。何ごとによらず、自分の力がゆきづまって苦しむとき、自分に力は全くない、まるまる他力のなさしめである、という教えを聞けば、その困っているどん底から「ありがとう」と叫ばしめられるのです。また、そう叫ばずにはいられないのです。

人間は何ごとによらず、最後はいきづまるものです。そこで世の敗北者や落伍者が、かえって救いの門に近づいているともいえるのです。自分に苦しみをかかえて泣く人は教えを聞くことによって苦しみをかかえているまま喜びの世界に転入せしめられるでしょう。自分の能力を信じている高姿勢の人は恐るべき将来をかかえております。そうした人には餓鬼道や地獄道が展開されていくでしょう。

終戦後、民主主義や自由主義が謳歌されるようになりまして、平和への道が開かれるかのごとく考えた人が多かったようですが、じつは平和どころか、斗争の世界が展開されていくばかりです。これは、民主主義を誤解して、みんなが平等に偉いものになり上がったからでしょう。現下の世相は全く地獄の様相です。みんなが平等に偉くなれぬ道が浄土真宗であります。

金子先生は

「念佛は自我崩壊（こわれる）の音である」

と申されましたが、自我崩壊とは、自我がなくなるのではなく、如来の他力に取り上げられることです。自我崩壊がそのままありがたいのです。

いかに困っているときでも、自我が崩壊すれば困ることはありません。困るというのは自我が頭を上げるからです。わがままがどこかに働いている証拠です。いいかえれば、如来から離れている印しです。どんな事件や問題に遭遇しても決して苦しむことはいらぬのです。自我が崩壊されたならば、そこが浄土です。苦しい中に飛び込むほかに自我崩壊はないと思います。

和讃に

「罪障功徳の体となる
氷と水のごとくにて
氷おおきに水おほし
さはりおほきに徳おほし」

と仰せられたのは、真宗のお助けを感銘にお示しくだされたおことばです。（了）

【南無の釈】より

＊南無と云ふは、御助けの手伝いをやめた心なり

＊南無と云ふは、我思ひに増減する用のなくなりた心なり

＊南無と云ふは、捨たらぬものを捨てるに及ばなんだ心なり

念仏申すとどうなるか

①「南無阿弥陀仏という仏さまはどんな仏さまですか？」

②「仏さまはどんなことをいっておられますか？」

③「念仏申すとどうなりますか？」

④「私たちはどんなふうに迷っているのですか？」

⑤「私たちは仏になれるでしょうか？」

⑥「なんで私が仏さまになれるのですか？」

とのご質問について。

＊

今回は「念佛申すとどうなりますか」という質問に移ります。

お念仏とは南無阿弥陀仏を称えることですが、〈南無阿弥陀仏〉と称える仏教は、宗派としては中国の現在の仏教、そして日本では浄土真宗や浄土宗（西山を含む）あるいは時宗などの日本の浄土教、そして天台宗や真言宗でも南無阿弥陀仏を称えます。

そのなかで浄土真宗のお念仏はアミダ仏の本願に従って称える念仏です。そのアミダ仏の本願とは佛説無量寿経に説かれているアミダ仏の第十八願のことです。この第十八願の中に誓われた「乃至十念 若不生者 不取正覚」（十念に至るにおよぶまで、もし生まれずは正覚を取らじ）すなわち「南無阿弥陀仏を十声なりとも称えるばかりで助ける」との本願、この本願の仰せに従って南無阿弥陀仏と称える行が真宗の念仏です。

アミダ仏が「十声なりとも一声なりとも、ただ称えるばかりで助ける」と誓われた第十八願を法然聖人は「念仏往生の願」と申されました。このお心は、私どもの方に浄土に生まれる条件として「ああなってこい、こうなってこい」「あれを止めよ、これを止めよ」とい

うような私たちに何かの善行や徳行を要求したり、あるいは善き心や浄らかな心を条件にして救おうという願ではなく、仏になるような行は一つもできないような無知無能の煩悩具足の私たちをあわれんで、私たちのこの身のまま、生まれつきのまま、今ここの私を全面的に引き受けて、浄土へ生まれしめんとの思し召しが「乃至十念 若不生者 不取正覚」とのアミダ仏の御誓いであります。

だから「お念仏を申すとどうなりますか」と問われたら、「どうなるもこうなるもありません、〈ただ称えよ、助ける〉のアミダ仏の仰せのままにお念仏するばかりであります。ありがとうございます」というほかはないのであります。

ですからお念仏は私の側から往生させていただく条件として称える行ではありません。アミダ仏は「称えたら助ける」というような、私たちが称えることを条件として助けようとされるお心ではありません。ここはよく受け取り間違いをするところです。

「汝、これを称えよ」「これを聞けよ」とアミダ仏から与えて下さり、称えさせて下さり、聞かせてくださるお念仏です。称える念仏も称えしめられる念仏であり、そのまま聞かしめられるお念仏であります。称え聞くお念仏はそのままがアミダ仏のお働きによる行でありますから、お念仏は本願力からの行、如来の行であります。

「我が名を称えるばかりで汝の一切の責任は引き受ける」との仰せは「そのままなりで助ける。なにもいらない」という絶対の大悲をお知らせ下さる言葉なのです。

お念仏は私がすこしでも善き者になって浄土に近づくための私の修行として称える行ではありません。お念仏はアミダ仏がナムアミダブツとなって称え聞かせてくださるところの、私を抱いて下さる仰せであり、喚び声であり、福音であります。

このお念仏を生涯、称えつつ聞かせていただく、その相続が念仏生活であります。

それはアミダ仏の仰せを聞きつつ生きる人生になりますから、アミダ仏と親しい関係にのずとなっていくことも自然であります。アミダ仏と親しくなるために行じるお念仏ではなく、私の方から救いにはまったく手も足も出ない私にアミダ仏があり来て下さり、喚びかより沿って下さり、喚びかけて下さるお念仏に引き寄せらきが南無阿弥陀仏と口に称え出て下さり、耳に「あなたと共にいる、助ける」と喚びづめに喚んで下さるお念仏です。

このお念仏に引き寄せられての人生は、求めざるにアミダ仏と親しい関係の中に自然に置かれるのであります。

ただこう申しますと、もとはアミダ仏と離れていたけれども、お念仏をいただくことによって、アミダ仏と親しい関係になったと受け取られますが、元々アミダ仏と人（私）とは存在的に不可分不可同で、離れがたく一つなのであります。アミダ仏のいのちの外に人のいのちも無いのであります。ただ人はそれを知らない、気がつかないのです。アミダ仏のはかりなき大悲のいのちの中にありながら、それを知らず、いのちを我が物のように思ってきたのです。

ところがお念仏をいただくようになって、アミダ仏の摂取の中にありということが知られてきてアミダ仏との不可分不可同の関係が知られ、アミダ仏と経験的精神的に親しくなるのであります。

これはアミダ仏の本願力のお働きによって与えられてくる恵みであります。ですから信心というのはアミダ仏と人の原関係を私の方が感知することともいえます。

ただその感知の程度に於ては浅い深いが当然あります。宗祖や妙好人という人たちはこの関係の実感が濃密になっておられるのです。

例えば妙好人と言うべき松並松五郎さんの歌に

「よほどアミダさんは
私にほれた
日毎夜毎に会いに来る
ナムアミダナムアミダ」
「一人称えて一人で聞いた
母と二人の声がする
ナムアミダナムアミダ」
「ふいと出る
この一声の
さけびにも
血潮はたぎる
きもにくい入る」

とありますが、仏と人との関係が濃厚です。

しかし妙好人のように仏と人（自分）の関係が濃厚ではなく、浅い場合が当然あります。むしろそういう方がずっと多いと思います。

しかしながら仏と私の関係の実感が浅くても一度アミダ仏にであうならば、アミダ仏と離れていない自己が知らされ、アミダ仏のいのちの中に摂めとられていることが知られますので、

アミダ仏と離れてしまって実感が全くなくなってしまうことはないはずです。

では信前というかアミダ仏に実感的にであっていない時期に称える称名念仏の実践は、アミダ仏と人との内面的関係には影響がないのかというと、そうは言えません。アミダ仏になんとかしてであいたいと願って称名念仏に励むことは無意味か、というとそうは言えません。

称えておればアミダ仏に必ずあえるとはいえませんが、しかし子供が母の名を呼び続けると母の心が伝わってくるということがあるように、子供が母の名を喚ぶように、人がアミダ仏の御名を称えていくならばアミダ仏とのであいの可能性が生まれてくることも事実であります。宗祖につぎのようなご和讃があります。

「子の母をおもうがごとくにて
衆生仏を憶すれば
現前当来とおからず
如来を拝見うたがわず」

しかもまだ信心がいただけていない人はアミダ仏の助けたもうご恩をよく聞きながら称名念仏を励みなさいとの宗祖のお言葉もありますし、ご和讃にも次のような歌があります。

「信心のひとにおとらじと
疑心自力の行者も
如来大悲の恩をしり
称名念仏はげむべし」

ただ念仏を申してアミダにあおうというのは、とかく念仏を申して自我でアミダ仏を捉まえようとしますので、この方向は「はからい」であって、この方向の延長上にアミダ仏が待っていて下さるのではありません。

むしろ「自我からアミダ仏へ」というこの方向が破綻するところに図らずも後ろからアミダに掴まれるのではないでしょうか。

「定散心交わるが故に出離なし」と宗祖が言われるように、念仏して何とかアミダにあおうとする自我の欲求、この欲求を先立ててそれを実現しようとする方向には出離は不可能といわれています。

しかし、ともかくアミダにあいたいと願って念仏を称え聞いていくところに、お念仏に籠もっている大悲の心が凡心に知らず知らず浸透してきて、我が身に出離の縁がなく、我が心は疑いの塊と知らされ、いわば自我が否定されて、遂に仏心大悲に気がつくということは当然あり得ること です。

ですから香樹院師も「念仏の
声だに口に
たえせずば
御名よりひらく
信心のはな」

と詠われているのです。この事については宗祖の『教行信證』（化身土巻）に「称名を専修して自力の心を離る」

とあり、また

「いわんや我が弥陀は名をもって物を接したまう。ここをもって耳に聞き口に誦（じゅ）するに、無辺の聖徳、識心に攬（らんにゅう）入す」

という先達（元照律師）のお言葉もあります。それゆえ真宗の聴聞は念仏申しつつ本願のお心を聞き続けていくのが教えに素直なすがたでありましょう。

最後に「念仏を申すとどうなりますか？」といえば、お念仏を申しお念仏を聞くことは、アミダ仏と人の原関係（不可分不可同）に応じている行為になりますから、アミダ仏のお働きによってアミダ仏の大悲の心がその人の心に届き、その後は仏徳が人生生活の上にぼつぼつなりとも現れてくるのは自然であります。

仏心大悲は不思議なことに煩悩妄念しかない我が心に入り込んでくださいます。こうしてぼつぼつではありますが自己中心的な貪欲は制御されていき、怒りの心は柔らぎ、自己批判と仏恩への謝念へと導かれていくのでありましょう。

（了）

【住職雑感】

この冬からずっと体中に湿疹ができてかゆくてたまらない。朝起きたときは布団のなかでしらずしらずあちこちをかきむしっている。内科の先生いわく「辛いのは痛みとかゆみであり、かくと気持ちが良いのでどうしてもかいてしまう」と。かゆいのでかくと気持ちがよいがますますかゆくなる。まさに「快感と苦痛は裏表である」。快楽のみを追い求めると自ずから苦しみがひっついて回る。龍樹菩薩が「疥（け）者（湿疹の人）の、猛焔に近づきて、初めはしばらく悦ぶといへども、後には苦を増すがごとし。貪欲の想もまたしかなり。始め楽着すといへども、つひには患ひ多し」と。湿疹ができて火にあたるとかゆくなる。それをかくと気持ちが良いが更にかゆくなりそれが広がって苦痛が増す。快楽と苦痛は裏表であるから、欲望の満足をのみ求めていくと苦はなくならない。

四月始め、兵庫県加西市にあるフラワーパークにチューリップを見に行く。丁度真っ盛りであった。チューリップだけではなくて、四季の花が楽しめるようになっている。花を見るといのちの神秘、いのちの不思議さが直に感じられる。「花笑い、鳥歌う」という言葉があるが、これは譬えではなくて実相だと感じる。